

「浦島さん」

田丸雅智

村では、浦島という男のことが話題にのぼっていた。

「亀にのった人がふらつと海から出てきてな。手に持った箱を開けたとたん、モクモクと煙が立ちのぼったんじゃ。すると、さつきまで若者だったのが、とたん老人に変わってしもうた」

「まさか。ボンじい、気はたしかかい？ ボケはじめたんじゃないのかな」

「こらポン太。この滅らさず口の若造めが。年寄りの言うことには耳を傾けるもんじゃ。バカにするとロクなことにならんぞ」

ポン太は、本当は老人の言葉をすぐにでも信じたいくらいだった。だが、それゆえに、彼は情報の真偽を確かめるのに、より慎重になっていた。

「気を悪くしたのなら謝るよ。で、その浦島って若者……いや、じいさんは、どこにいったんだい」

「それがの、村はずれのあばら家に入っただとところまでは見届けたんじゃが。翌日あらためて訪ねてみると、もうもぬけのからじゃったわい」

「証拠はなし、か」

「おぬし、まだわしをボケ扱いする気か」

ボンじいを怒らせないよう、そこでポン太は話を打ち切った。

ポン太は、日ごろから歳をとることに異常なほどの憧れをもっていた。

その理由はいくつかあったが、第一に、年寄りには仕事をしなくていいからだった。

ポン太はもう子供ではなかったのに、そろそろまともに働き始めなければならなかった。たまの親の手伝いだけでは、周りの目が気になり始める年齢だったのだ。しかしポン太にとっては、働くことが苦痛でならなかった。なぜ嫌なことを、いやいやしなけりやならないんだ。嫌なことはしなくてもいいじゃないか。いつもそう言って家で怠けてばかりいたので、彼は親と衝突することがしばしばだった。だが、それでもポン太は働くことをかたくなに拒みつづけていた。

またポン太は、老人にのみ与えられた特権に、強い憧れを抱いていた。すなわち、若造と意見が対立したときに、「若いからだよ」と相手を一蹴してしまえる権利だ。なんと便利な言葉だろう。年寄りには、うらやましいなあ。これさえあれば、わからず屋の親をやり込めてしまうことができるってのに……。

それからポン太は、本当は漁師なんかより物書きになりたいと思っていた。しかしそれには、圧倒的に人生経験が足りていないという自覚があった。彼は怠け者ではあったが、そういった判断のできる程度の頭はもっていたのだ。歳をとらないとわからないこととがあるし、歳をとらないと書けないものがある。したがってポン太に言わせると、良い物書きになるためには歳をとらなければならぬのだ。このことも、彼が年寄りに憧れる理由のひとつとなっていたのだが、ただ歳をとりさえすれば人生観が深まると思い込んでいたあたりが、若者の愚かさである。

彼は、毎日頰杖しながらそういった無駄な考えにふけては、現実から目をそむけてばかりいた。

歳をとるための努力は、一通りやってみた。

あるときは、時間が過ぎるのを家にこもってじっとしていることで早めようとした。だが、退屈すぎて数日ともたなかった。

楽しい時間を過ごす、時間は早くすぎるといつか早いことを始めようと思つた。しかし、彼の周りには酒を飲み散らかし、騒ぎ、品のないジョークを言い合つて、道端で吐いて眠るような若者ばかり。それが好きな人たちは良いけれど、ぱつとしない彼がそんな中にまじつた

ところで、楽しい時間が過ごせるはずもなかった。

かといって、大人たちの談笑に加わることもできなかった。彼らは一様に「若いちは遊ばにやいかん」と彼をはねつけるばかり。そりゃあ、それもひとつの選択肢だよ。でも、何も全員が同じことをやる必要もないじゃあないか。仲間に入れてもらえないポン太は大人たちを好き放題のしつたあと、不愉快そうな表情を浮かべながらぶつくさ
と立ち去るのみだった。

そんなだから、彼は周りから煙たがられ、のけ者にされ、しまいには、両親と心やさしいボンじいの他には、誰からも相手にされなくなってしまうたのだった。

ポン太は、もつと浦島という謎の男のことを知りたかった。が、その本人は行方知らずになってしまったらしい。となると、瞬時に歳をとるための手がかりは、ボンじいが見たというおかしな箱だ。そしてその箱は、男が海からもつて来たもののようなのだ。

うん、だんだん読めてきたぞ。その箱は、きつと海の中にあるに違いない。

ポン太は、来る日も来る日も海へもぐりつづけた。こんなことばかりに熱心になって、まったく困ったものである。

しかし、箱につながるようなものは、何ひとつ得ることができなかった。問題の海岸

をうろついて見ても、見つかるのはせいぜいクラゲと、イカの骨くらい。

そこで彼は、次の手段に打ってでた。つまり、漁の手伝いを積極的に行いはじめたのだ。漁の網に箱が引掛かるとあるかもしれない。そう考へてのことだった。父親は、近頃やけに手伝うようになった息子のことを不審に思いつながらも、我が子の成長に目を細めるのだった。

それと並行して、彼は道行く人々を注意深く観察するようにもなった。箱をかかえている人を見つけると、よくよく様子をうかがった。

それと思しきものを見つけた時はいそいで覆面を取りだし、相手が誰だろうと容赦なくかつぱらった。目的のためには手段を選ばぬ姿勢。その力を、もつとまっとうなことに使えばいいのに。箱という箱を取り上げ、開けまくったが、無論、いつも箱の中身は期待はずれなものばかりなのだった。

また、ある時ポン太は考へた。謎の男は、海亀にのつて海から現れたらしい。すると、鍵は亀にあるのかもしれない。

彼は、海亀をつかまえ、それにのつて海へと乗り出した。しかし、うまくバランスがとれず途中で亀の背から落ちてしまった。亀は、何事もなかったかのようにそのまま海へと帰っていった。

そんなことを飽きもせず繰り返しているうちに月日は流れ、ポン太も歳をとった。偉大な下心のあるポン太も、もともとの怠け者体質から、そろそろ漁の手伝いをするのがおっくうになってきていた。

近頃の父親は、自分はそろそろ引退し、ポン太にすべてを任せるといふようなことをほのめかすようになっていた。そうやってしまうと、もう逃げることはできないのだ。ポン太は焦っていた。

だが今からでも遅くはない。あの箱さえ手に入れることができれば、働かなくてすむのだ。残りの何十年分をすつとばすことができるのだ。さつさと手に入れて、早く老後を楽しみたいものだ。

ある日、ポン太が砂浜で日課の散歩をしていると、見たことないほどの美女を見かけた。女はどうしたことか、あまり落ち着きがない様子だった。

ポン太は躊躇なく話しかけた。美女に漂うどこことなく普通でない雰囲気、何かあるなど直感したからだった。

「ちよつとお話ししませんかね、ぼくと」

女は返事をする代わりに、こう尋ねた。

「浦島という方をご存じないでしょうか」

浦島！ ポン太は驚きを隠せなかった。よく見ると、女は小脇に箱をかかえていた。
「その箱は……」

「その、浦島という方にお渡しするつもりのもので……」

ポン太は、ここぞとばかりに強く申し出た。

「浦島という方なら知っています。ぼくが、その箱を確かにお渡ししておきましょう」
すると女はほっと安堵の表情。

「本当ですか、それは助かります。ありがとうございます」

ポン太は、大事そうに箱を受け取った。これが念願の歳をとる箱というわけか。あれだけ苦労したのに、手に入る時は、案外あつけないものなのだ。

「おまかせください」

「では、くれぐれもお願いますね……」

ポン太には嫁がいなかったので、もう少し謎の美女と話をしていた気持ちにもなった。だが、いまは女どころではないのだ。

彼は女を見送ると家に飛んで帰り、震える手でさつそく箱の紐を解きにかかった……。

童宮城に戻った女は、出迎えた婆やに事の成り行きを語っていた。

「どうやら、無事に渡せそうよ」

「よかった、よかった」

始終を聞き、婆やも一安心。だが、婆やは表情を引き締めて言った。

「結果的にどうにかなったから、よかったようなものを」

女は、しゅんとする。

「おまえが間違つて浦島さんに別の箱を渡したりするもんだから、こんな面倒なことになつたのですよ。そそっかしいつたらありやしない」

「気をつけます……」

女は、表面上は反省の弁を述べてみたものの、失敗を挽回できたことで内心は達成感に満ちあふれていた。それどころか、自分のまいた種が原因なのに、まるで良いことでもしたかのような思いにひたっていた……。

箱を開けたポン太は、もくもくと立ち昇る黒い煙に身をあずけていた。

あたりが晴れると、急いで彼は自分の姿を鏡で確認した。

が、そこに映る姿を見て、ポン太は愕然となった。

そこには、精悍な顔つきの若き日の自分の姿が映りこんでいたのだ。

そんなバカな……。

彼の髪の毛だけは、瞬時に絶望で真っ白になってしまった。

その頃、お姫様は、今度こそ若返りの箱を渡せたことに、婆やおとがめ何のその、すつきりした心で満足げに顔をほころばせていた。